

薦 め た い 理 由

フィールド・ワークを経験したことは大変良かったと思う。
 学問する事、生きる事といった大問題を考える機会となるので。
 内容が濃くて、興味ある人にはおもしろいと思う。
 哲学というものに対してもっていた固苦しく、むずかしいという観念をくつがえす。おもしろく、興味深い授業。

毎年ちがう一つのテーマを様々な角度から解明する。哲学という固いイメージとは正反対の授業。

現代国際関係をシミュレーションなど様々なモデルを用いアプローチしてくれる。
 平和研究を世界をとりまく環境の歴史性、批判性、構想性と、おりませながら展望していく。
 真の法学がわかる。

なぜ学問をするかと疑問をもつ人のために。
 総合科学部設立理由等が理念的なところでわかったから。
 個人的好みで好きでした。

プログラム通論だけではわからない実践が学べる。
 これこそ専門の講義といったかんじ。
 講義の合間の雑談がおもしろい。
 話題が面白い。話がうまい。顔が面白い。
 生理学・行動科学をやりたい人にとっては必須だから。

専門外の人にもそれなりにわかりやすく教えてくださる。
 新しい世界がみえる。
 学問の深さがわかる。自分の頭の悪さがわかる。
 メチャためになる。 Very very complicated.
 具体的なモデルを用いて分子の立体構造のイメージをつかみながら自分で考えて解決させるよう授業が進むのでとても勉強になった。
 説明が細かくわかりやすい。
 毎年話す内容が違い、新鮮味がある。
 迫力がある。
 身近な現実問題をとりあげてくれることが、とても刺激になったと思います。
 熱心で理想を目指し、熱弁をふるって下さいます。
 単位がとりやすい。先生がおもしろい。
 スライドがおもしろい。
 教官の間味あふれた授業がきける。余談がほのぼのとしていて、心が豊かになる。
 下手な漫才よりおもしろい。
 別名ダジャレ学
 おもしろくてためになる。野外調査の一端に触れることができる。

る。といってもわりと長いから、計画的でなくてもその時興味をもったことをどんどんやれば良いと思う。「総合科学部とは？」などという議論の好きな人が総科には多いが、それもたまにはいいとしても、そんなことより自分の熱中してやれる事を見つけ出して、それで4年間の暇をつぶすつもりでやれば、充実した4年間になると思う。

さて、話はまったく変わるが、ひじょうにおもしろい本を新入生に紹介したい。それは「ファインマ

ン物理学」という物理の本である。かなり趣味の悪い装丁だが中味とは関係ない。僕は環境科学コースの物理系に属しているので物理の本はいろいろと見た(読んだとは言わない)。けれど、おもしろかったのはこの本だけだ。今、物理など全然興味ない人はぜひ一度見てほしい。人にすすめられると読みたくない、という人もいると思うが、まあそう言わずに。内容は何かというと、ファインマンというアメリカの物理学者が大学で講義したときの講義録で、

という意味で有害図書である、といっても言い過ぎではないと僕は思う。

52年度生環境科学 渡辺 純二

全部で5冊ある。著者の、物理がおもしろくてたまらないというふん囲気が伝わってきて、こっちまで楽しくなる。おおかたの物理の一般教育のテキストは、学生の興味をそそらない、あるいは興味をそぐ

その2

「私のささやかな学問の旅」

すぐに本題に入りましょう。私が広島大学の総合科学部を選択した動機は色々ありますが、一番大きな動機は、自分の適性と興味に合った学問分野を見つけよう、というものでした。そして、ようやく入学後4年目にして、数理統計学という学問が私の適性に合い、又、興味を満たしてくれるものと感じはじめ、現在も、出来るなら将来もこの分野での研究を続けてゆきたいと思っています。

さて、入学以後のことをお話しますと、入学当初は、とにかく何でもやりたいという気持ちが先走り、なかなか興味がしぼれずあれこれ手当たり次第に本を読んだ記憶があります。友人がそういう種類の本が好きだったためか、岩波文庫の白版や青版が私の本棚に多く残っています。

そうこうしているうちに、興味を持ち出したのが科学史や科学哲学の分野でした。以前から自然科学一般に興味もありましたし、現代の科学がどのようにして成立して来たのかを知りたかったのです。しかし、知りたいとは思っても書かれていないことも研究しよう、とまでは、考えませんでした。

次に傾倒したのが都市研究でした。私は東北の米沢市という田舎の出身で都会というものに興味を感じていて、(都会とは同義ではないですが)都市というものの動きをさぐりたい、と単純に思ったんです。

しかし、都市を研究するにも色々角度があると思ひ、どこか一つの観点にまず焦点をしばらく考えました。そして実際に選択したのが心理学と経済学でした。一つの観点にはしほれませんが、両方ともつながりが強く、どちらも重要だと思ったんです。その訳は、経済の動きというものもミクロに見れば人間行動の集積だと考えられるし、逆に言えば人間行動の大きな動機の一つには経済的欲求充足の動機がある、と思ひ、都市の構成単位の人間の行動と都市の経済的機能を研究することは、都市研究としてかなり大きな意味があると、自分勝手に判断したからなんです。

そして、そういう面から見てゆこうという意欲をもち、準備が必要だと考えまして、心理学と経済学の学習を同時に始めました。中でも心理学は社会心理学、経済学は開発経済学にそれぞれ中心を置いて学習していったんです。

少し話しの筋はそれですが、私は前々から自分が悩んでいたこともあって、それらの悩みを克服するためにも、また、人間の行動の本質を知りたいとも思っていましたので、人間行動の一つのモデルを研究する方法としての心理学には興味をもっていました。それで、心理学に一番力を注ぎましたし、人間行動研究のためには、生理学のレベルから考えるべきだと思ひ、生物学や生理学の実験にも出ささせていただきました。また、社会学の行為論の本なども参考にしたことを覚えています。

しかし、そういう学習の過程で強く感じたのは、人間を知ろうとして心理学を学習し用語をマスターしてゆくにつれ、私の内面で学問と自分の生活の境がなくなり、どんな行動もしらさずしらすうちに心理学の用語で解釈してしまっているんですね。けれども、そういう解釈というのはあまり気持ちが良いものではないのです。逆に人間がつまらなく見えて来るような気がしたんです。

こういう経験をするにつれて自分に心理学は向いていないと思ひてきました。心理学を研究できる人は中途半端な人間ではだめなのですね。余程学問と割り切っていて、生活と切り離すか、それとも、逆に実生活すべてを研究の対象にできる程、強い人間への興味がある人が良いと思ひます。私はどちらの範疇にも入れなかったんです。

話をもどしますと、都市研究のために心理学と経済学を学習してゆくうちに、(特に新しい)本や論文の端々に統計学的手法や用語が使われているのに気づいたんです。

手法としてだけ統計学を扱っていればよいものを、手法の理論的根拠をつきとめない^{たち}とすまない質で、統計学(特に多変量解析)の理論を学習し始めたん

です。何でもやれば興味がわくもので、“蛇の道は蛇”、いつのまにか統計学の中にどっぷり足をつこんでいて、心は統計学の中にありました。悪く言えば、本末転倒したのです。道具がいつのまにか道具でなくなり目的になった訳ですから。

そうしているうちに、私は統計学が自分の適性と興味に非常に合っていると感じたんです。何故かという、私は理論をいつも先行させるのが好きなんです。そして、数理統計学の理論は数式論理（つまり、手法として数学のいくつかの分野）を使いますので厳密に見えるのです。つまりコツコツと努力しないと理論さえも身につけられない、ましてや応用もおぼつかない、という厚みを感じたんです。しかも応用範囲は非常に広い。およそ確率的な要素を含むものであれば、自然科学、社会科学を問わないんです。逆に統計的な手法を使わなければ結論が出せない分野も多くみられます。とにかく、私はコツコツと努力をつみ重ねて、やっとある程度の理論を修得でき、その理論を広く色々な分野に応用できる所に魅力を感じたんです。

ところで、自分がやっと入学当初の目的の自分の

専攻分野の決定が決まったのが4年の時なんです。かなり遅すぎた感がありました。実際遅すぎたと思います。統計はかじっていてもシロウト学問で、準備となる基礎数学も十分ではないし、研究レベルまで使えるような統計理論もほとんど修得していませんでした。これで卒論を1年で書いても良いものができるとは到底思えませんでした。それで、いくつかの就職先も内定していたのですが、就職はとりやめて、卒業をのぼすことにして、1年で卒業研究できるだけ基礎実力をつけ、留年時に卒論を書こうと思い、現在に至った訳です。そして、大学生活の5年目は中でも一番充実したものになりました。無駄と思える講義はとる必要はなく、自由な時間を統計学のゼミと卒業研究にあてることができ、毎日そればかり集中してやっているのですから、わずか1年で統計学の知識が目に見えてふえるのがわかりました。今年度は、卒論を統計学会で発表もできまして、また卒論も予想どうりの結果がでて、納得いったものになりました。

51年度生 情報行動科学 佐藤 敦

「卒論題目紹介」

I. 修士論文

コース	氏名	論文題目名	コース	氏名	論文題目名
地域	明石 淑見	エリアーデの宗教現象学 —その方法と世界—	地域	等 雄一郎	—「山の音」を中心に— リンケッジ・ポリティックス の理論
”	小松 出	湖南農民運動の研究	”	堀川 静夫	Madame Bovary 研究 —色彩と心理—
”	舘 利恵	二葉亭四迷論 —その女性観を中心に—	環境	井上 雅裕	ワイ性同質遺伝子系統オオムギ子葉鞘の生長と細胞壁の物理化学性
”	田原 光宏	チャイルド・ハロルドの遍歴研究	”	太田 憲良	海洋における親生物元素の分布と挙動
”	葉山 明	米国大統領候補指名手続きの改正についての考察 1968年～1980年 —1968年～1972年民主党の改正を中心に—	”	岡村 元義	DNA結合性蛋白質 fd Gene 5 の構造形式
”	水野 好清	初期ルネサンス期フィレンツェにおける家と社会 —ゴロ・ダーティの場合—	”	荻島 正	副腎ステロイド水酸化電子伝達系の反応機構
”	天野 雅郎	神話と哲学 —象徴解釈への哲学的視角—	”	金田 典子	再構成膜法による光合成系II (PSII) の初期過程の研究
”	天羽 康隆	川端康成における日本的なるもの	”	北原 義典	手書き「常用漢字」オンライン認識システム
			”	草加 伸吾	山火事が森林生態系の物質循

コース	氏名	論文題目名	コース	氏名	論文題目名
環境	小林 祐子	環に及ぼす影響について 牛副腎ミクロソームのステロ イド水酸化関与、チトクロ ムP-450	環境	成田 健一	と再形成に関する研究 都市構造物表面からの蒸発量 測定に関する研究
〃	新垣 則雄	白米と玄米におけるコクゾウ の摂食・産卵選好について	〃	橋本ともえ	軟体動物歯舌筋における興奮 伝達のイオン機構
〃	杉田 真哉	北米北西部太平洋岸における 植生変遷 —ワシントン州ピュージェ ット低地帯—	〃	福森 泰雄	アフリカツメガエル3倍体に おける生殖腺の発育とヴィテ ロジュニン合成
〃	鈴木 仁	ネギにおける姉妹染色分体交 換(SCE)の研究	〃	藤本 淳	R(Fe、Co) ₂ 水素化物の物 性
〃	住野 寿彦	光照射による黄化カボチャ子 葉中のサイトカイニンの変動	〃	牧原 義一	R-Mn 金属間化合物の物性
〃	高見 利弘	液体二成分合金の理論	〃	松浦 謙士	都市構築物表面における顕熱 輸送 —顕熱伝達係数について—
〃	竹本 裕之	蛍光法・中性子散乱法による 生体モデル膜構造の研究	〃	矢吹 直人	沿岸における重金属の沈積に 関する研究
〃	坪池 栄子	痛みの制御に関する実験的基 礎研究	〃	吉田 静江	地層生成環境の基礎的研究 —現世有孔虫に基づく環境 論的考察—
〃	豊原 明	太陽虫における微小管の崩壊	〃	加門 美昭	土地区画整理の計量分析

II. 特別研究論文

コース	氏名	論文題目名	コース	氏名	論文題目名
地域	石井 直人	医と安藤昌益	地域	徳田 邦明	古代における鬼霊信仰につい て
〃	臼井 洋子	セツルメント運動の意義と役 割 —労働問題からの考察—	〃	中野 清人	三島由紀夫研究 —「近代能楽集」と古典と の関わりについて—
〃	岡田富士代	殉教について —日本人の異文化体験に関 する—考察—	〃	中山 暁代	世紀転換期におけるアメリカ 社会構造の変化 —オハマ・ボストンのmo- bility に関する考察よ り—
〃	岡本 市郎	芸北地方における廃村の研究	〃	浪尾 公子	かぶきの思想
〃	椎木由美子	色彩語の研究	〃	西尾 裕之	朝鮮の被差別民「白丁」問題 —日本の部落問題との比較 から「差別」を考える—
〃	神野 和美	ダレス外交 —スエズ・東欧問題を経て のアメリカの外交政策の 転換—	〃	仁田奈美子	谷崎潤一郎研究
〃	菅原 昭生	親鸞研究 —他力思想から絶対(純粹) 他力思想へ—	〃	長谷川豊彦	流行語について
〃	高橋 哲子	フランス・アンシャンレジ ーム期におけるコレージュの食 生活	〃	八田 典子	竹久夢二研究
〃	高橋真奈美	平塚らいてうの研究 —人間形成と女性解放への 出発—	〃	早田 健文	日本植民地下台湾の教育
			〃	福田 浩志	イギリスの土地利用と気候区 分 —イギリスの気候について—
			〃	三戸 恵子	第2次大戦後におけるアメリ

コース	氏名	論文題目名	コース	氏名	論文題目名	
地域	宮崎 純子	カの対ドイツ政策 ジョンソン政権における公民権立法	社会	佐藤喜良子	開発と地方自治 —香川県番の州工業地域をめぐって—	
	妙見佳代子	阿波藍業における労働力の研究		佐藤 延明	広島市政令指定都市の移行過程と問題点 —広域合併からの考察—	
	村松 誠	移民と都市政治 —シカゴにおけるポーランド系アメリカ人の場合—		塩沢 恭子	在日朝鮮人を通してみた就職差別	
	森本 純	中世芸備地方における真宗の展開過程		角南 憲一	研究・学園都市の現状と問題点 —筑波と賀茂の場合—	
	諸橋 和恵	別役実論		竹原 進一	消費の社会的機能	
	山川 訓弘	輪中村落の構造とその変貌		田中 宏典	ウィリアム・ゴドウィンにおける人間と社会	
	吉田 誠	日本昔話についての—私論— —狐のイメージを中心—		中川 浩	戦後日本における教育財政の展開	
	和田 貴代	十六・七世紀フランスにおける魔女について		中島 教順	メーカの流通支配に関する—考察—	
	社会	土井 敏邦		パレスチナ人の基本的人権に関する—考察—	福田 靖	岡山県の地域開発政策と吉備高原都市
		久野 庸雄		イギリスに於ける普選法の確立と政治的代表制	松尾 孝弘	インド社会にみるアウト・カーストの問題点
秋本 秀明		キューバ危機 —海上封鎖に到るアメリカの決定過程—	松下 和史	現代の住宅問題と住宅金融		
田原 範朗		ジョージ・ロウソンとジョン・ロック	三浦 俊男	中間政府の成立と権力抗争 —印・分離独立への一過程—		
安藤 清子		婦人労働法制の動向と問題点	水之江 徹	SALT I の分析 —核軍縮は何故実現できないか—		
沖本 真理		国際政治とオリンピック	情報	佐藤 敦	いくつかの多次元F行列の最大固有根の最大値のパーセント点に対する近似	
恩田 徹		平和研究の回顧と展望		久野 和英	リアクタンス生起に関する条件分析的研究	
甲斐金次郎		生活圏に関する地域開発の展開と課題 —広域市町村圏を中心—		室谷 隆司	吃音の行動療法に関する研究	
勝美 研次		企業の地域政策と地域社会 —パブリック・アフェアーズ活動の事例研究—		山田 泰幸	スチューデント化された分類統計量Z* にもとづく制約判別関数(分類分岐点の選択)	
栢 三津子		柳田國男の農村論		青木 正恵	Sensation Seeking Behavior の実験的検討	
仮屋崇一郎		戒能法社会学方法論の検討		猪崎 哲也	数量化の結果与えられた数値の柔軟性の検討	
葛間 俊孝		わが国兵器産業に関する—考察—		磯田美智子	球状蛋白質の構造形式の動的機構	
国行 一也		新国際情報秩序 —第三世界の挑戦—		市村 康	ユムシ体壁の収縮	
河野 主税		都市近郊農地の権利変動 —農家の承継とその周辺高陽町、白木町の場合—		岩田 昌子	太陽虫のシスト形成に関する電子顕微鏡的研究	
佐々木真弓		マイノリティ問題の—考察— —アーンベトカルの思想と行動より—				